

# 「共有」の分析哲学

三木那由他(大阪大学大学院講師)

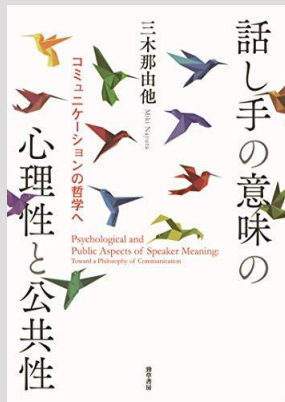
miki.nayuta.hmt@osaka-u.ac.jp

# 自己紹介



詳しい経歴等  
はこちら

- 三木那由他(みきなゆた)
- 専門は分析哲学、特に言語とコミュニケーション
- 「コミュニケーションとはそもそもどういう営みなのか」をテーマにしばらく研究していた
- 最近ではコミュニケーションが不当なものとなり、誰かにとって暴力的になる状況について考えている



# 分析哲学

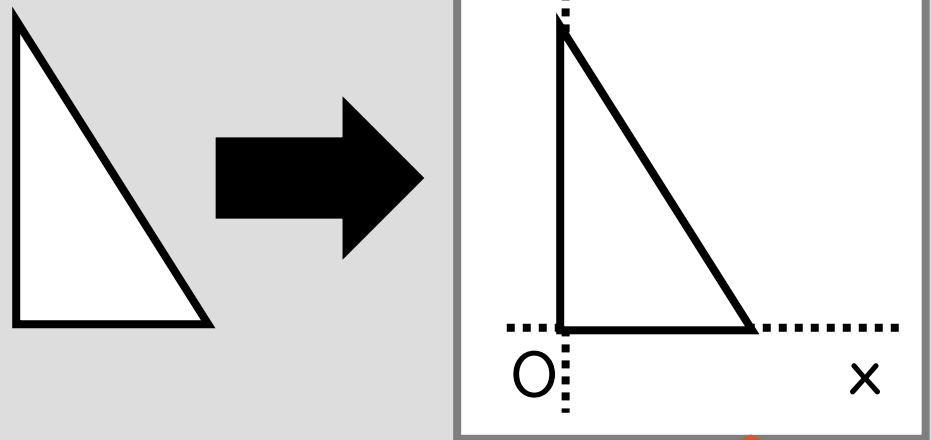
# 分析哲学 (analytic philosophy)

- 19世紀から20世紀に変わるころに起きた哲学上のひとつの流派
- 分析哲学のルーツはゴットロープ・フレーゲ、バートランド・ラッセル、ルートウィヒ・ウィトゲンシュタインらの論理学、言語哲学の業績にある
- 「分析哲学とは何か？」への明確な答え自体が与えにくく、はっきりとした定義のもとでまとまっているというより、互いに微妙に異なりながら共通のルーツを持つひとつのジャンルくらいに思ったほうがよさそう
- ただ、名前に関する「分析(analysis)」という言葉はよく使われる

# 分析 (analysis)

## 解析幾何学 (analytic geometry)

図形を座標系上の  
グラフに翻訳



代数的に図形を扱う

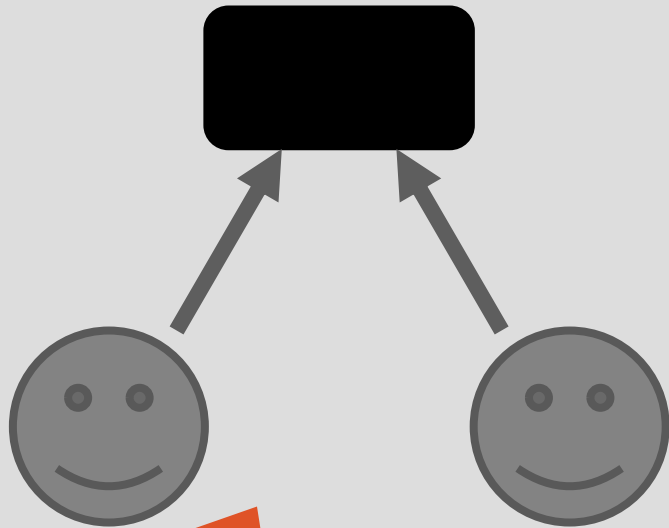
## 分析哲学 (analytic philosophy)

さらに論理学の表現への  
翻訳をおこなう

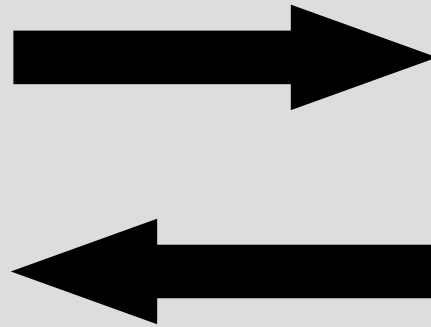


適用の必要十分条件を問う  
(しばしば論理学の概念を利用)

# 「共有」を分析哲学的に考える



「AとBが〇〇を共有している」  
「AとBが一緒に〇〇している」  
...



?



この状況がどのようなものなのかを特定する

# ここからの話

## メッセージの共有

ポール・グライス、スティーヴン・シフアー

## 慣習の共有

デイヴィッド・ルイス

## 規範と共有

マーガレット・ギルバート

## 先立つ共有なき共有

# メッセージの共有

ポール・グライス、スティーヴン・シファー

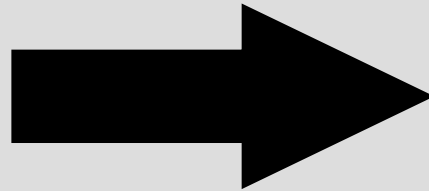


# コミュニケーション

最近、  
駅前にカフェ  
ができたよ



へえ



駅前にカフェ  
ができた



コミュニケーションに成功すると  
メッセージが話し手と聞き手のあいだで共有される

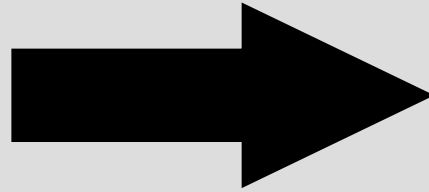
# 額面通りでないコミュニケーション

最近、  
駅前にカフェ  
ができたよ



このあたりでお勧め  
のお店ってある？

へえ



駅前のカフェは  
話し手お勧めだ



共有されるメッセージは、発話された言葉の  
額面通りの内容を超えることがある

# ポール・グライス『論理と会話』

駅前にカフェ  
ができたよ

へえ

〈駅前にカフェ  
ができた〉と  
信じさせよう

〈駅前にカフェができた〉  
と信じさせようとしている  
のだと気づかせよう

〈駅前にカフェができた〉のだと話し手  
が信じさせようとしている以上、実際に  
カフェはできたのだろうと思わせよう

論理と会話

ポール・グライス 著・清塚邦彦 訳

STUDIES  
IN THE  
WAY OF  
WORDS

# グライスにおけるメッセージの共有

〈駅前カフェができた〉と信じさせよう

〈駅前カフェができた〉と信じさせようとしていると気づかせよう

〈駅前カフェができた〉と信じさせようとしていると気づかせようとしていると気づかせよう

〈駅前カフェができた〉と信じさせようとしていると気づかせようとしていると気づかせようとしていると気づかせよう

駅前カフェができた

話し手は〈駅前カフェができた〉と信じさせようとしているのだから

話し手は〈駅前カフェができた〉と信じさせようとしていることに気づかせようとしているのだから

話し手は〈駅前カフェができた〉と信じさせようとしていることに気づかせようとしていると気づかせようとしているのだから

これも必要になるのでは?という批判

# グライスにおけるメッセージの共有

- グライスによれば、
  1. 話し手は聞き手に何かを信じさせようと意図している
  2. 話し手は自分の意図のすべてについて、それを聞き手に気づかせようと意図している
- けれど、これだといたちごっこ式に延々と意図が増え続けてしまい、どこまで行ってもメッセージの共有に到達しない
- 「メッセージが共有されている状態」とはどういうことかをきちんと考える必要がある

# Stephen R. Schiffer: *Meaning*

(Icon by Made by Made Premium)



相互知識 (mutual knowledge)

同じことをふたりのひとが「ともに知っている」状態  
知識が共有されている状態

STEPHEN R. SCHIFFER

**Meaning**

# シファアの相互知識

蠟燭があいだにある

蠟燭があいだにある  
と相手も知っている

蠟燭があいだにあると自分が  
知っている と相手も知っている

蠟燭があいだにあると自分が知っ  
ていると相手も知っている と自分が知  
っている と相手も知っている



蠟燭があいだにある

蠟燭があいだにある  
と相手も知っている

蠟燭があいだにあると自分が  
知っている と相手も知っている

蠟燭があいだにあると自分が知っ  
ていると相手も知っている と自分が知  
っている と相手も知っている

# シフアーにおけるメッセージの共有

- シフアーによれば、
  1. 話し手は聞き手とのあいだに相互知識を作ろうと意図している
  2. 話し手は自分の意図のすべてについて、それを聞き手に気づかせようと意図している
  3. 相互知識は、「Aはpと知っている」、「Bはpと知っている」、「AはBがpと知っている」と知っている」、…の無限の系列として定義される
- けれど、これだといたちごっこ問題が解決していない
- また、相互知識というものを本当に人間が持ちうるのか、そんなものをコミュニケーションを通じてどうやって実現しているのか、疑問が残る
- 共有を、個々人の心理の集積として捉えることの困難



# 慣習の共有

デイヴィッド・ルイス

# デイヴィッド・ルイス『コンベンション』

(Image by macrovectoron Freepik)



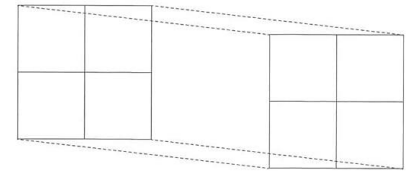
## 慣習 (convention)

そうでなければならぬ必然性がないのに、集団内で共有されている行動パターン (e.g. 左側通行)

Convention A Philosophical Study

コンヴェンション 哲学的研究

デイヴィッド・ルイス David Lewis 瀧澤弘和 訳



# ゲーム理論の応用

- 各プレイヤーは戦略のセットを持っている
- 各プレイヤーが選択した戦略の組み合わせに依存して、各プレイヤーの利得が決まる
- 各プレイヤーは自分の利得を最大化する合理的な選択をおこなおうとする

# ナッシュ均衡

Bさんの戦略  
↓

Aさんの戦略→

	右側通行	左側通行
右側通行	$\langle 1, 1 \rangle$	$\langle -1, -1 \rangle$
左側通行	$\langle -1, -1 \rangle$	$\langle 1, 1 \rangle$

ふたりが同じ戦略を選んだ  
ときに限り利益が得られる

この場合、ひとたび片方の戦略で一致したら、合理的に考える限り戦略を変える理由がなく、戦略の選択が安定する

# 慣習の共有

(Image by macrovectoron Freepik)



みんな左側通行をしている

みんなほかのひとが左側通行することを期待している

左側通行自体が右側通行より好ましいわけではない

みんなほかのひとが左側通行するときに利益が得られるがゆえに左側通行をしている

ほかのひとが右側通行していたなら利益が得られる右側通行を選んでいた

ナッシュ均衡になっているとわかっていて、かつほかのひとたちもそれがナッシュ均衡だとわかっていて、かつ合理的な選択をしようとし、かつほかのひとたちも合理的な選択をするだろうと期待している

# グライス／シフアーとルイス

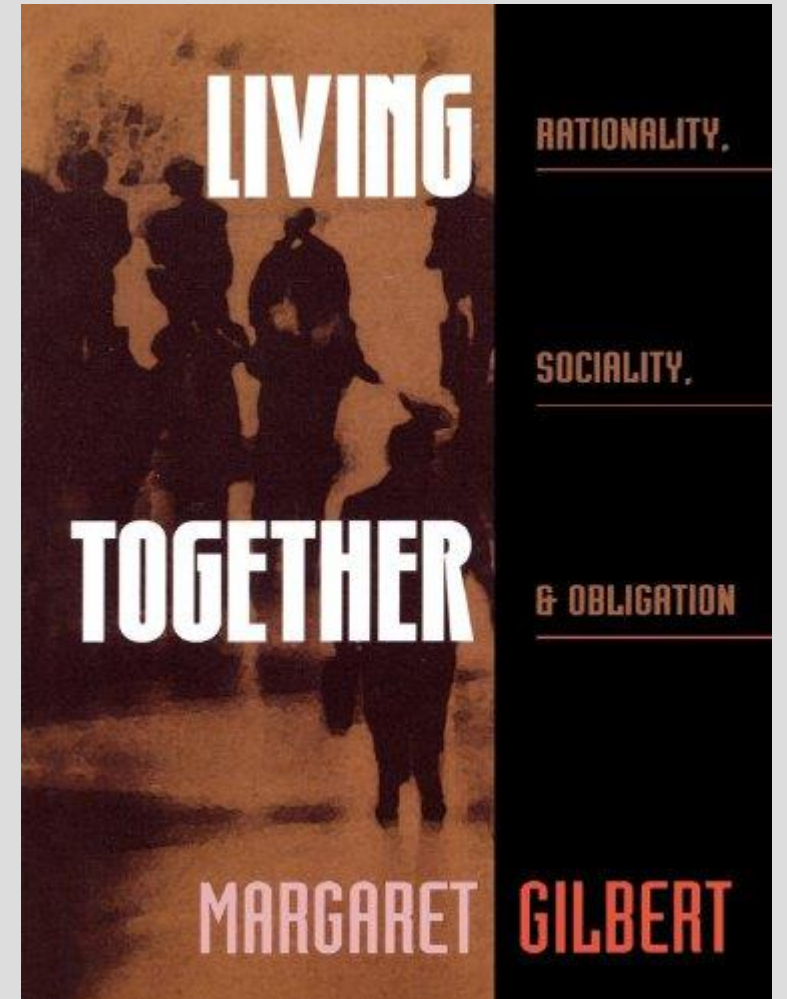
- (メッセージと慣習という違うトピックを扱っているという点を脇において比較すると…)
- グライス、シフアーにとって、共有は参加者たちの心理の問題とされていたが、それではうまくいかなかった
- ルイスはゲーム理論を採用することで、共有を行為の擦り合わせの問題としている

# 規範と共有

マーガレット・ギルバート

# Margaret Gilbert, *Living Together*

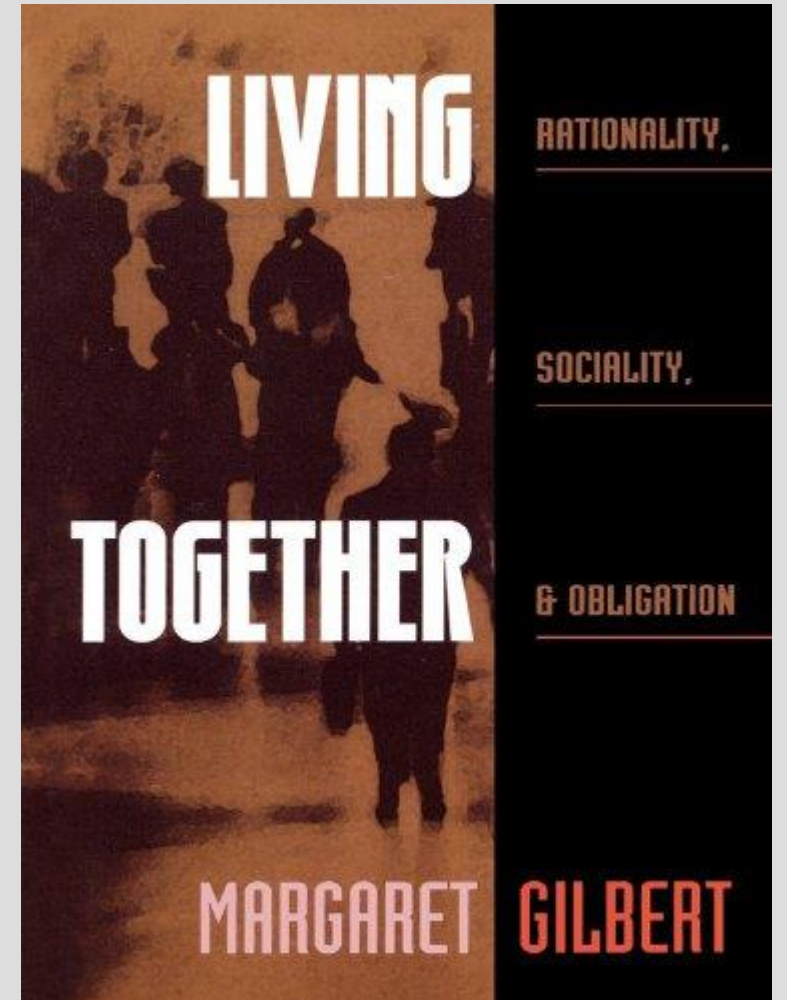
- ルイスは「ひとは合理的に行動する」、「ひとはきちんと利益を求め、損害を避ける」と前提にしている
- だが、不合理をものともせず、利益を求めないひとがいる可能性もある
- 合理性ベースのルイスの議論では、そうしたひとに「従いなさい」と言えない
- 慣習に関する「従うべきものだ」という規範的側面を扱えていない



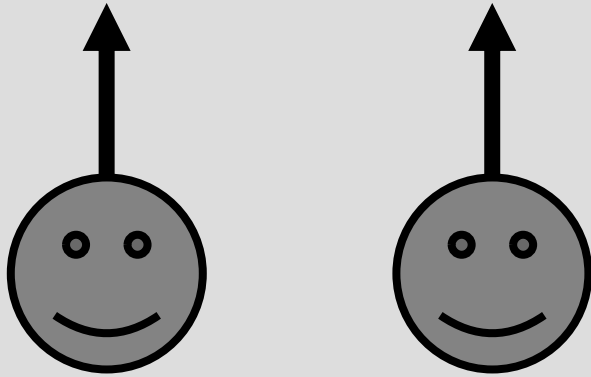


# Margaret Gilbert, *Living Together*

- ギルバートは、「一緒に何かをする」、「信念や価値観を共有する」、「慣習を共有する」といった事柄全般の根幹に規範性があると考える
- 共同のコミットメント (joint commitment)

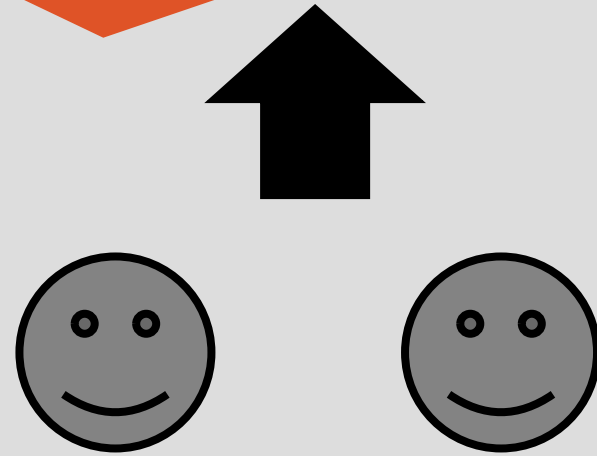


# 「一緒に歩く」



ふたりのひとが同じ速さで  
同じ方向に近い距離を  
保って歩く

相手が勝手にやめたら非難する  
権利がある、などの独特の規範性



ふたりのひとが一緒に歩く

# 共同のコミットメント

一体となって歩く (=歩く一個の個体をエミュレートする) ことへの共同のコミットメント

責任

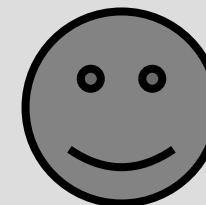
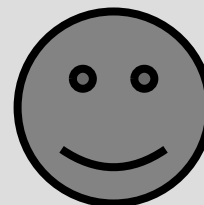
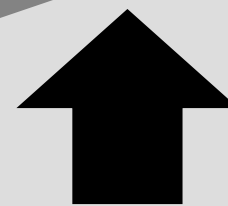


参加



責任

相手が勝手にやめたら非難する権利がある、などの独特の規範性



ふたりのひとが一緒に歩く

この規範性こそが、共有の本質

# グライス／シフアー、ルイス、ギルバート

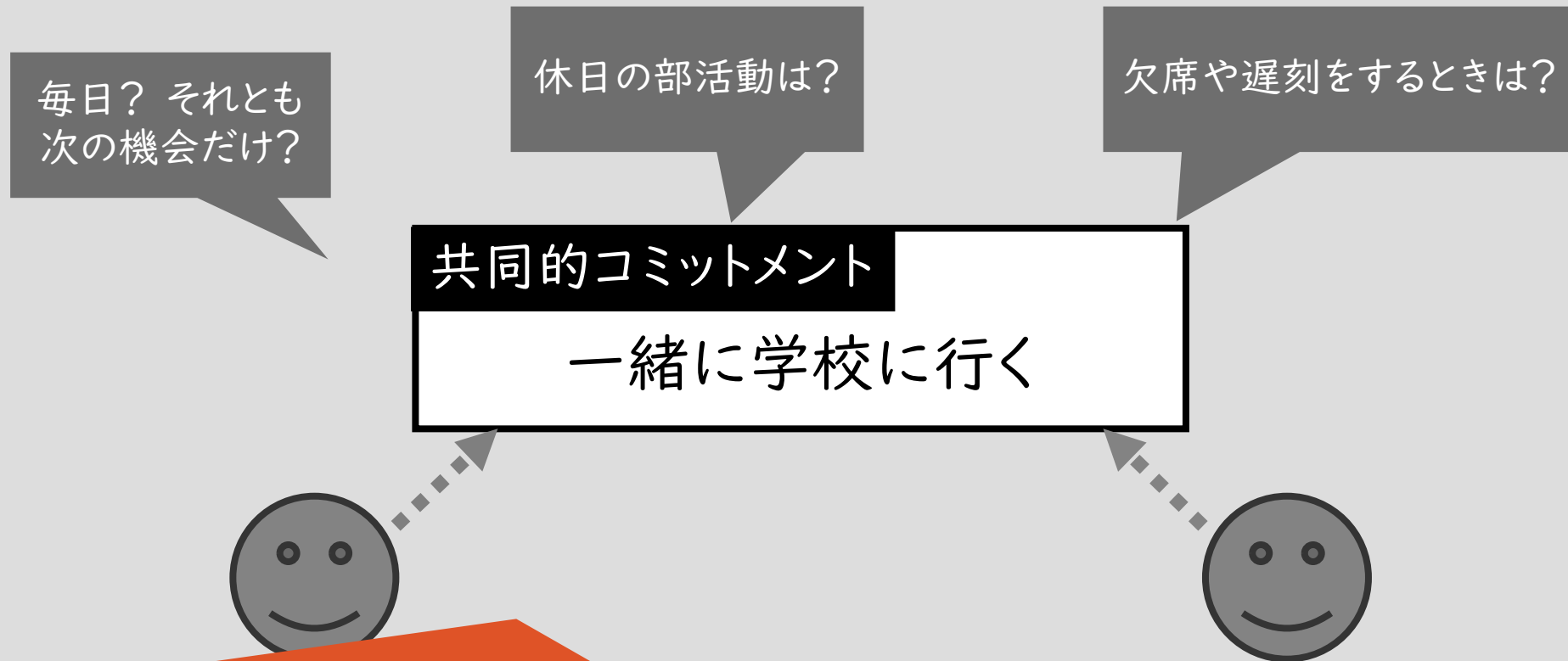
- グライス、シフアーと違い、ルイスは参加者の心理ではなく行動の擦り合わせという観点から共有を理解する
- しかし、そのために「参加者たちは合理的な選択をする」という前提を置いている
- ギルバートは心理でも合理性でもなく、互いの逸脱を非難する権利と互いに適切な振る舞いをする義務という参加者間の規範的な結びつきから共有を理解する

先立つ共有なき共有

# 共有の前提としての共有

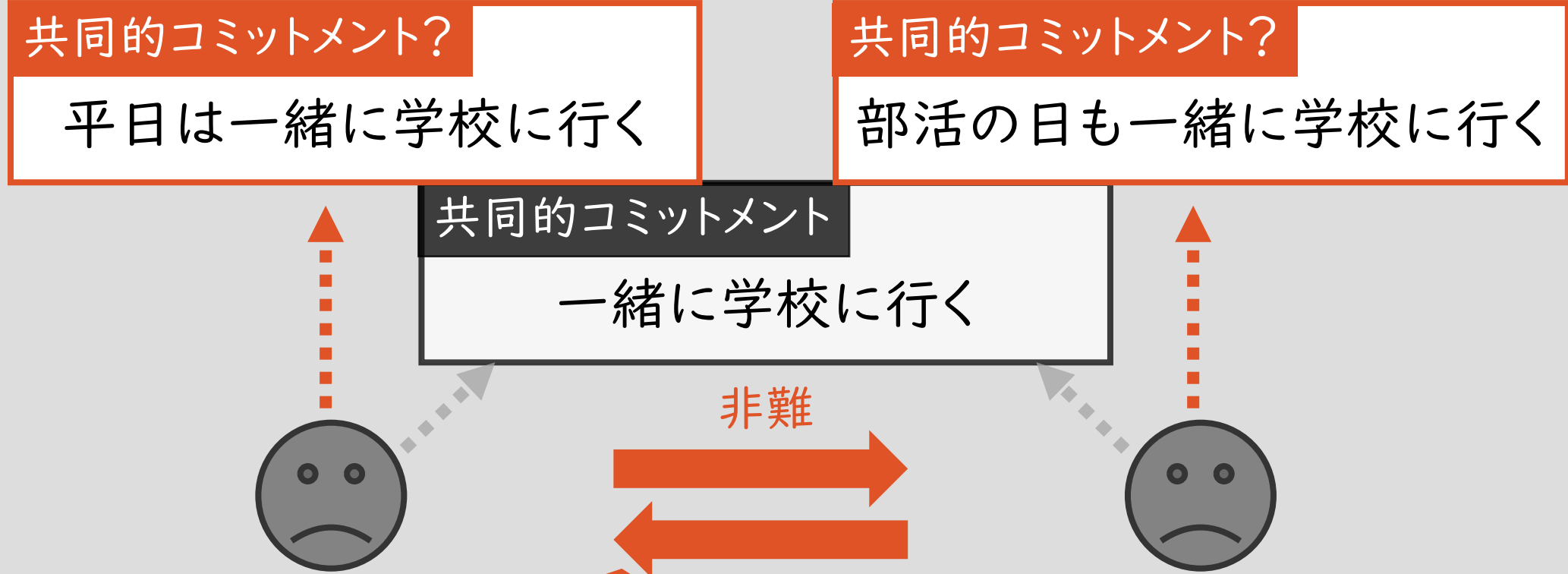
- グライスやシフアーの場合には、相手の心理を理解する方法がすでに共有されていて初めてメッセージの共有が成り立つ
- ルイスの場合には、みながある選択肢を取るなどの知識がすでに共有されていて初めて慣習の共有が成り立つ
- ギルバートの場合には、共同のコミットメントが参加者による参加意志の表明によって形成されるとされており、その表明方法が共有されていて初めて共同のコミットメントの形成が成り立つ
- これまでの論者はみな、すでに何かが共有されていなければ新たな共有は生まれないと考えていそう

# 共同のコミットメントの曖昧性



共同のコミットメントが形成されると各参加者が判断して実際に行為を始めたとしても、その時点で想定されていない状況に至るまで「適切な振る舞いかた」が共有されているわけでは必ずしもない  
共同のコミットメントは形成時点でただひとつの行動パターンに収束しているわけではなく、そこには曖昧性がある

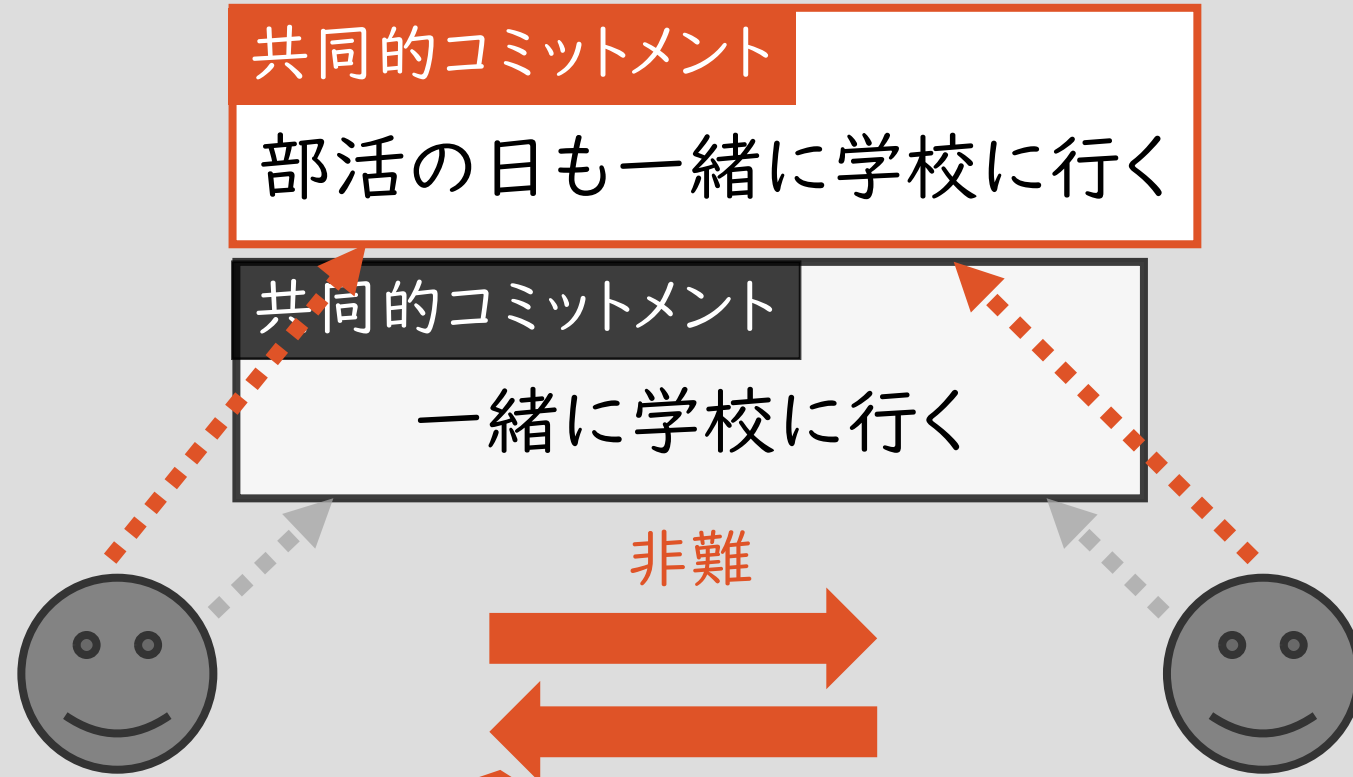
# 共有の破綻



相手が自分の想定と異なる振る舞いをし、それを非難したくなったときに、初めて共同的コミットメントの破綻が意識される



# 共同のコミットメントの調整



互いに非難や自己弁護、譲歩をすることを通じて、改めていま起きた破綻が生じない共同のコミットメントへと調整する

# 一方的な非難

共同のコミットメント?

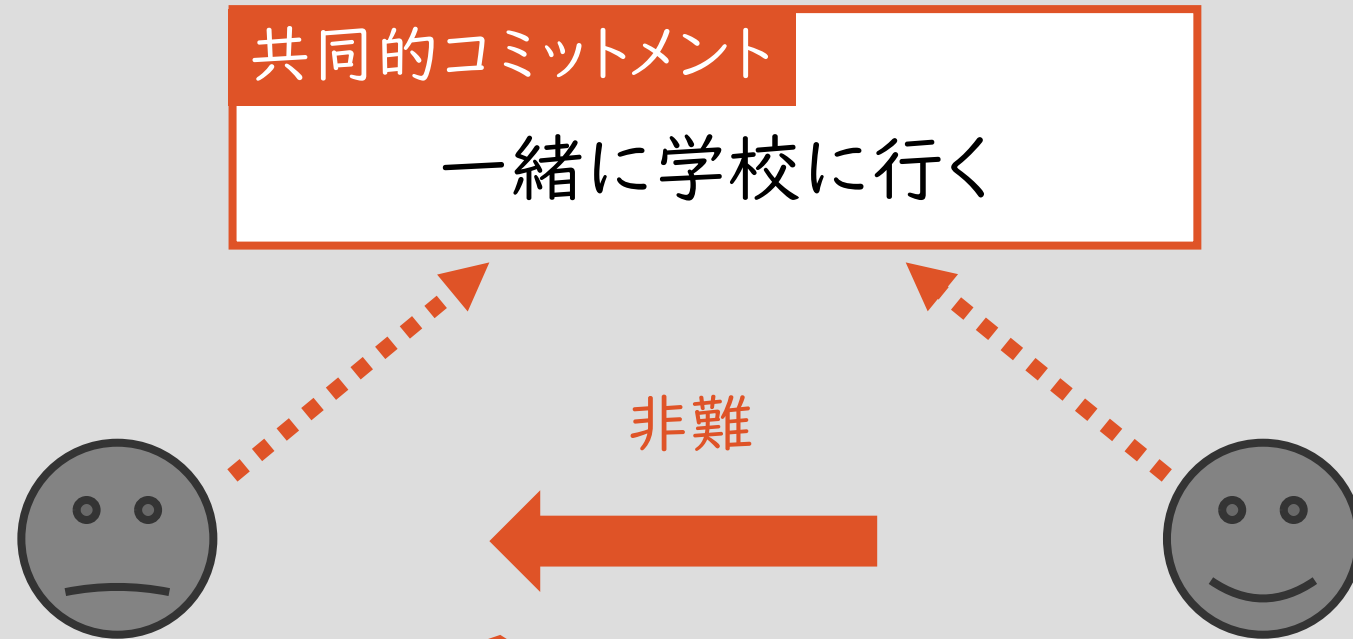
一緒に学校に行く

非難



場合によっては一方が共同のコミットメントを形成した気さえないのに、他方が形成した気になって非難をすることもあり得る

# 共同のコミットメントの事後的形成



その場合でも、その非難を受け入れ、それに応答したなら、共同のコミットメントがあったのだということに事後的に調整されうる

# 共有に関する私の考え

- 考えや価値観、慣習の共有は、参加者の心理の問題ではなく行為の擦り合わせの問題
- 行為の擦り合わせは合理性ではなく、共同のコミットメントに基づいてなされている
- しかし、一個の共同のコミットメントが「ある」ということを先立つ共有に基づいて確信することはできず、一個の共同のコミットメントを曖昧性なしに成立させることもできない

# 共有に関する私の考え

- 共有とは、厳密に一致している保証のない行動指針の緩やかな同調と、同調の破綻が露わになった場面で行動指針を擦り合わせようという意志に存するのではないか